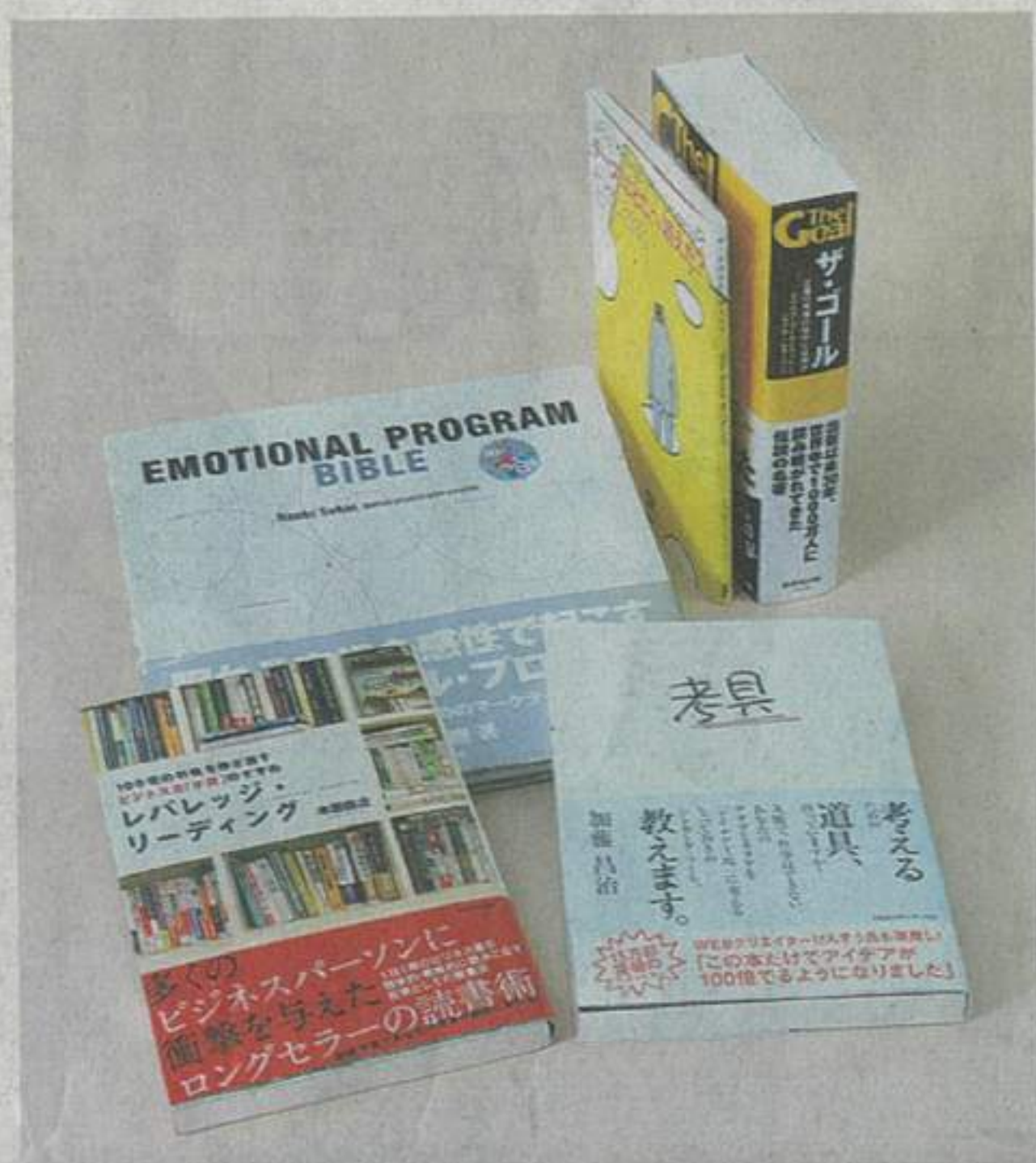


こんな日曜日が待ち遠しい。

NIKKEI The STYLE

あなただから、あげたい。



中川政七さんから後輩経営者へ。
相手の経営事情に合ったビジネス書



田中優子さんから友人へ。
研究で半年間滞在した中国の藍染め布



阿部住さんから知り合いのシェフらへ。
注文を受けてから石臼でひく紀州のサンショウ



田中さんから石牟礼道子さんへ。
思い入れのある茶を唐棧織の布で包んで



阿部さんからなじみのレストランの店員へ。
季節感のある和紙小物



阿部さんから友人へ。
佐渡島の酒蔵が廃校などで醸した日本酒

My gift to you.

クリスマスまであと1カ月となった。心を込めて、あなたらしく――。贈り物の季節に飛び交うフレーズに、頭を悩ます人も多いだろう。それもそのはず、歴史をひもとけば日本の贈答は長らく儀礼的で定型的だった。贈り物に一家言ある人々は、どんな思いで品を選んでいるのか。「もらう」よりうれしい、「贈る」喜びを尋ねた。

自分だから渡せるものを

思い立ったが贈りどき



(写真上)工芸品店「中川政七商店」を4店舗展開する中川政七さん。お客様の半数以上が贈り物を探しに来る。東京都港区の表参道店。(写真下)中川さんは友人の人生をなぞる特別ティナーをレストランに依頼した。その一皿ゆでた「ヤシと素ハタ」(東京都港区の「sio」)

よい贈り物とは何なのか。「よい」の多くを知る人に聞いてみた。1人目は中川政七商店(奈良市)代表の中川政七さん。麻のふきん、漆の食器など各地の工芸品を集めた店内は贈り物を買うお客さんでにぎわう。

「よいものは世の中にたくさんある。でもよいものと贈るべきものは違いますよ。ね」と中川さん。カバンの中には、贈られたものがたくさん入っている。ペンケース、書類入れ、贈り物は「くまモン」のデザインで知られる水野さんだ。「僕がいまいちばん使っているのを見つけては、ずっと贈ってくれるんです」。

たとえば仕事の書類を入れていたボロボロのクリアフォルダは、水野さんからのプレゼントで革製の書類入れに「水野さんはいちばん上のお兄さん」の存在で、会社のフレンジーもお願いしてきた方。「よいものは何が教えてあげよう」という気持ちで形をとったのが水野さんからの贈り物なんです。

一種の師弟関係は、贈り物によってより強固なものとなった。

い。昨年末、水野さんの独立20周年のお祝い。贈ったのはレストランでの食事。お互いなしとある東京代々木上原のレストラン「sio」にサブライズと呼び、コースはスタートした。

1皿目はゆでたモヤシと素ハタ。服け出しで金欠だった水野さんが、モヤシや貝なしパスタばかり食べたことに由来する。鶏のタシとバターを含めてチーズをのせて、味は素ではない。皿目はアヒル。アヒルの仕事を注いで成功したこと、どんな「いい」贈り物もおかしくないとみた経営者に月1冊ずつ、年近く渡し続けた再建を支えたことである。

贈るものはモノとは限らない。例えば「自分よりよいものを何でも知っています。水野さんには、贈れるモノなどない」。

近年は中上・歳暮などの慣例的な贈答は減ってきている。伝えたい気持ちがあるなら、何もないときに贈らなくてはいいと思います。日本のホテルコンシェルジュの先輩としておでなしの現場を率いていた明海大学教授の阿部住さんは話す。

行きつけのレストランに向かうとき、阿部さんは伝統工芸「青山スクエア」(東京都港区)によく立ち寄る。「すてきな工芸品を発見できるんです。紅葉のカードや、心と足早い雪模様の便箋。『気持で季節感を伝える』でもらえよう。気品をレストランのスタッフに『遅くまでお疲れさま』と渡す」。

「ありがとうございます。言葉にこそ想像して自由に考えれば、贈る側ももらう側も楽しめる」と中川さんは言う。

することで、思いはうまく伝わると思うんです。

「贈るときはふとしたときにやってくる。佐渡島に行った時、廃校を利用した酒蔵や地元の酒米へこだわって知られる尾瀬酒造を訪れた。試飲しながら酒蔵をよったのが古い友人だ。何年か前に世帯はなつて以来、お礼をしたかと思いつながらそれを思い出した。友人は次の日本酒好き。誕生日でもお歳暮ときでもなかつたが、日本酒を見てあなたを思い出しました。あのときは……と添えお酒を贈った」。

「ただ有名な酒を買って贈ればいいというじゃない。人に贈りたいと思うものに出会ったからこそ贈るんです。日々受ける恩を贈り物という形に少しずつ返してあげれば、絆はもっと深くなる」。



名コンシェルジュだった阿部住さんは「相手の負担にならず楽しんでもらえる贈り物」を探す(東京都港区の伝統工芸「青山スクエア」)